放送大学研究年報　第27号（2009）63-73頁
Journal of The Open University of Japan, No. 27（2009）pp.63-73

創発的内省理論の展開

船　津　　衛[1)]

The Development of the Emergent Reflexivity Theory

Mamoru FUNATSU

summary

It is said that the 21th century is risk society and the risk is conquered by reflexivity. It is shown that a human being looks back at himself, and it comes to get over problematic situations by reflexivity. Reflexivity of the modern society is always examined in the light of the information that social practice is related to that practice.

In the age of high modernity, people are isolated and destabilized by "disembedding" and risk arises there, and reflexivity comes to be activated for the solution of risk. According to Giddens, the expert system is necessary in the modern project of reflexivity and the therapy by the specialist comes to play a big part. "The pure relationship" are produced by that, and it comes to be brought.

Giddens' theory is a special Western European, and a recognition is leading and an emotion is ignored in it, and sufficient elucidation isn't made about the structural condition of reflexivity. Various inequality and gaps exist in the modern risk, and many difficulties arise in it for the conquest of the risk. A diversity exists economically, culturally and socially in reflexivity, and an economical, cultural, and social deviation, inconsistency, confrontation spreads out.

Reflexivity is done in the communication process with others. A human being talks with himself as well with his talking with others through "the significant symbol". It comes to occur by the external communication's becoming immanence in the individual of the conversation with others. It comes to be raised to emergent due to the development of the internal communication. That is emergent reflexivity.

Intimacy is constructed again due to the activation of emergent reflexivity. Perfect agreement between the people and unification don't occur in the new intimacy. The new intimacy which consists of the people's free networks is being produced there. That is not the purpose-mean rationality of the industry and the economy, but it is intimacy based on the communication rationality. As for the people, it becomes possible that "itself whom be actual" is expressed in intimacy based on "the communication rationality". It is decided that modern intimacy comes to the sight as alternative intimacy.

要　旨

21世紀はリスク社会であり、そのリスクは内省（reflexivity）によって克服されるといわれる。内省とは人間が自己を振り返ることを表わし、内省によって「問題的状況」が乗り越えられるようになる。A・ギデンズによると、近代社会の内省は社会的実践がその実践に関する情報に照らして常に検討され、改善され、その性格を構成的に変容するという事実のうちに存在する。ハイ・モダニティの時代には「組み込み解消」によって人々が孤立化し、不安定化し、そこにリスクが生じる。そのリスクの解決のために内省が活性化するようになる。ギデンズの見解によれば、リスクの乗り越えのためには専門家システムが必要であり、専門家によるセラピーが大きな役割を果たすようになる。そこから純粋な関係性が生み出され、親密性の変容がもたらされることになる。

このようなギデンズの理論に対して、特殊西欧的であり、認知中心的であり、感情が無視されており、内省の構造的条件について十分な解明がなされていないという批判がある。現代のリスクはさまざまな不平等や格差が存在し、経済的、文化的、社会的なズレ・不一致・対立が広まり、深まってきており、リスクの克服には多くの困難が生じている。ここから、内省について経済的、文化的、社会的な多様性を理解することが必要となり、内省の社会性と創発性についてより具体的に明らかにすべきことになる。

内省は他者とのコミュニケーション過程において行われる。そこにおいて人間は「意味のあるシンボル」を通じて他者と会話するとともに、自己とも会話を行う。他者との会話という外的コミュニケーションが個人のなかに内在化

[1)] 放送大学教授（「社会と産業」コース）

することによって、内的会話としての内的コミュニケーションが発生するようになる。内的コミュニケーションの展開によって新たなものが創発されてくる。それが創発的内省である。

創発的内省の活性化によって、親密性が再構成される。新たに生み出される親密性は人々の間の完全一致や一元化ではなく、自由なネットワークからなる新たな親密性となっている。また、新しい親密性は産業や経済の目的合理性ではなく、コミュニケーション合理性にもとづく親密性となっている。コミュニケーション合理性にもとづく親密性において「本当の自分」を表現することが可能となる。そこにおいて、オルターナティブな親密性として現代的親密性が姿を現すことになる。

Ⅰ．リスク社会と内省

1．リスク社会と内省

21世紀はリスク社会であるといわれる。リスク社会とは、U・ベックによると、原発事故、自然破壊、環境汚染などのリスクが過度に拡大された社会である（Beck, 1986）。そして、リスク社会は「自らが及ぼす悪影響や危険要素を感知できない、自立した近代化過程の中に出現してくる」（Beck, 1986, 訳17頁）ものである。リスク社会ではリスクがグローバル化され、地域的な範囲を広げ、地球規模に拡大するとともに、貧しき者も富める者も平等に経験するように平等化される。貧困は階級的であるが、スモッグは民主的であり、貧困は排除することが可能であるが、原子力のリスクは排除できないものとなっている。

また、A・ギデンズによると、リスクは生態系の荒廃や惨禍、核戦争や大規模戦争、経済成長メカニズムの破綻、全体主義的権力の増大となっている（Giddens, 1994a）。このようなリスクがいまやジャガーノート（巨大エンジンを装着して疾走する超大型の長距離トラック）状態になっており、そこでは「メガ・ハザード」（巨大なる危険）となってしまっている。リスク社会は科学・技術が危険を作り出す社会であり、自己破壊の社会である。

このように、ベックもギデンズもいずれも現代社会のゆくえをきびしく見ている。しかし、まったくペシミスティックというわけではなく、かれらはまた、リスクが解決可能であると考えている。すなわち、リスクは内省（reflexivity）[注1] によって克服される。内省とは人間が自己を振り返ることを表わし、内省によって「問題的状況」（problematic situation）が乗り越えられる。内省過程において、問題点が明確化され、解決策が考え出され、新しい状況が生み出されるようになる。このことが行われるのが「内省的近代化」（reflexive modernization）である。

ベックによると、社会は自らをリスク社会として概念把握するなかで内省的となり、「社会はその社会そのものにとって主題なり、課題となる」（Beck, 1994a, 訳22頁）。そして、「内省的近代化」はひとつのモダニティによる産業社会への「組み込み」の解消ともうひとつ別のモダニティによる産業化への「再組み込み化」を意味している。つまり、「産業社会というひとつの時代全体の、創造的（自己）破壊の可能性を意味している」（Beck, 1986, 訳12頁）。そして、「内省的近代化」の基本的命題は「社会の近代化が進めば進むほど、行為の担い手（主体）は自己の存在の社会的条件を内省し、その条件を変える能力を獲得していくようになる」（Beck, 1994b, 訳318頁）。

S・ラッシュによると、このような内省には２種類のものがある。ひとつは社会的存在条件を内省する「構造的内省性」である。それは行為主体が社会構造による束縛から解放され、社会構造の規則や資源を内省するものである（Lash, 1994a, 訳215頁）。もうひとつは行為主体が自らを内省する「自己内省性」である。「自己内省性」は「近代化のより一層の進展に不可欠な機能的要件を発達させる条件」（Lash, 1994a, 訳210頁）でもある[注2]。

そして、「内省的近代化」は自然環境、社会環境、精神環境に関して、自立した主体性を実現できる可能性を切り開いていくものである。「内省的近代化」によって、「行為主体を構造から遊離させ、行為主体が構造に関して絶えず力を増大させていくようになる」（Lash, 1994a, 訳207頁）。人間は自己を内省し、状況を検討し、新たなものを生み出すようになる。リスクは内省を通じて乗り越えられるものとなる。

リスク社会の乗り越えを可能とさせる内省という人間の内的世界については、しかし、これまでの社会学ではあまり問題とされてこなかった（Archer, 2003：19）。それは内省が人間の内観（introspection）として観念論的、主観主義的なものとして考えられ、自然科学方法に基づく実証主義の立場では観察不可能とされてしまったからである。ギデンズによると、「社会思想の最も伝統的な学派では内省性をその帰結を無視できるか、あるいは可能なかぎり過小評価できる単なる厄介ものと見なしてきた」（Giddens, 1993, 訳200頁）のである。

しかし、自然科学と同じように、人間現象を機械のアナロジーによって把握し、その因果関係を明らかにしようとするやり方では、人が恋に陥ることと物体が落ちることとの違いが問われないものであり（Blumer, 1969）、それは「社会科学におけるニュートンのような人をいまだ待ち望む人たちは単に到着しない列車を待っているだけではなく、まったく見当違いの駅で待っている」（Giddens, 1993, 訳38頁）ことになってしまう。けれども、ギデンズの強調するところによれば、内省ほど人間生活にとって中心的なものは存在しないのであり、したがって、「内省を社会生活の中心的な要素として認めない社会思想家たちの著述には、批判する人々がしばしば指摘する奇妙なパラドックス

を見い出す」（Giddens, 1993, 訳200頁）ようになってしまうのである。

2．「問題的状況」と内省

現代のリスク社会はまさに「問題的状況」となっている。「問題的状況」とは妨害や障害などによって、これまでの習慣的行動がそのままでは進行が困難となるような状況である。そこにおいて人間は自己を内省し、内的世界の活性化を通じて新たな世界を生み出す必要がある。内省によって「問題的状況」が表示され、解釈され、再構成されるようになる。

内省は内観とは異なり、他者との関連において行なわれる社会性を有している。しかも、それには新たなものを生み出す創発性が備わっており、内省の展開によって自己および他者や社会の変化・変容が生み出されるようになる[注3]。内省は「問題的状況」においてとりわけ活性化される。J・デューイによると、「問題的状況」とは人々が環境との関係において不均衡な状態であることを意味し、その克服は問題を解決し、状況を変化させる「探求」（inquiry）によって可能とされる（Dewey, 1938）。

G・H・ミードによると、「問題的状況」において、人間の内省活動が活発化する。地震などによって生じた道路の亀裂の前では、犬ならばあっちにいったり、こっちにいったりして、試行錯誤の行動を繰り返す。これに対して、人間の場合はすぐには行為せず、「遅延反応」を示し、そこで立ち止って、どうすべきかをあれこれ考えるようになる。そして、状況をイメージに描き、問題点を明らかにした上で、問題解決の方策を生み出し、それを頭の中でリハーサルする。人間は内省によって「問題的状況」を乗り越え、新たな行為を展開するようになる。

ミードは内省がコンフリクト状況から生じると考えていた。人間は他者の期待に自己の行為を意識的に適合させる必要がある。しかし、複数の他者の期待は必ずしも調和しておらず、ときに矛盾することもある。そういう場合に「一般化された他者」の期待の形成がなされるようになる。そこにおいて多様なパースペクティブがまとめられ、組織化され、一般化される。それによって、これまでの行為あり方が変容され、新しい社会的行為が出現し、状況が再構成され、共有の意味が生み出されることになる。

リスクはこのような内省を通じて乗り越えが図られるようになる。リスク社会は、ベックにしたがえば、「その趨勢からして自己批判社会でもある」（Beck, 1994a, 訳26頁）。そこでは危険をどのように管理、暴露、包容、回避、隠蔽するかが重要な問題となる。したがって、「内省的近代化」によって産業社会の前提そのものの変化が押し進められるようになる。21世紀はこのような「内省的近代化」が進行する時代である。

3．内省への関心

内省については、これまで人々の関心があまり向けられてこなかった。けれども、1990年代の初期から、「現代のアイデンティティの一つの次元として内省の概念への関心が激増してきた」（Adams, 2007：43）。そして、内省は「オリジナルには文法用語として、アイデンティティのコンテキストにおいて、個人主体がそれ自体に意識を向け、自らの実践、選好、内省それ自体の過程をも内省する個人主体の行為」（Adams, 2007：43）を指すものである。

内省はそれ自体で存在したり、個人が恣意的に作り出すのではなく、他者との関係において社会的に形成されるものであり、また、内省の展開によって内的世界の変容や新たな生成が生じてくるものである。したがって、内的世界の固定性や規範性ではなく、内的世界の変容や創発性を明らかにすべきことになる。人間の内省から新たなものを生み出す創発的内省（emergent reflexivity）は他者の期待や態度を通じて客観的に自己の内側を振り返り、過去および未来と関連づけながら、そこに新たな世界が創出されることを表わす。創発的内省によって、自分が新しく生まれ変わると同時に、 他者や社会も変わるようになる（船津, 1989）。

M・アダムズによると、ギデンズの『モダニティと自己アイデンティティ』（1991）の出版は内省という用語への関心を一般化するのに中心的役割を果たしてきた（Adams, 2007：43）。ギデンズの仕事は自我の３つの要因である無意識、実践的意識、内省を概念化しようとする洗練された試みであり、また、内省を社会構造の変容＝「構造化」（structuration）と結びつけようとするものとなっている（Adams, 2007：xi）。

Ⅱ．ギデンズの内省理論

1．ギデンズの内省理論の構成

ギデンズによると、近代社会の内省は社会的実践がその実践に関する情報に照らして常に検討され、改善され、その性格を構成的に変容するという事実のうちに存在する（Giddens, 1990, 訳55頁）。ギデンズはかれ独自の「構造化」理論の展開において、人間の内省をその中心に位置づけている。人間は社会構造を能動的に形成する主体であり、また、構造は人間行為に規制を加えるものではなく、行為を可能とさせるものである。そして、その場合に、人間の内省が大きな役割を果たすようになる。

ギデンズにおいて、こんにちは第２の近代、ハイ・モダニティの時代である。それは「モダニティのもたらした帰結がこれまで以上に徹底化し、普遍化していく時代」（Giddens, 1990, 訳15頁）である。そして、モダニティのダイナミズムは、「時間と空間の分離、社会生活を時間・空間面で正確に帯状区分する形での時間と空間の再統合、社会システムの『組み込み解消』（disembedding）[注4]、時間・空間の分離にともな

う諸要因と密接に関連している現象、および、知識の絶え間ない投入が個人や集団の行為に影響を及ぼすという意味での社会関係の内省的秩序化と再秩序化」（Giddens, 1990, 訳30-31頁）である。

モダニティの顕著な特徴はモダニティの構成要素である徹底した内省に関する認識である。この内省の背景は「組み込み解消」に伴う時間と空間の変容が社会生活を既成の教えと実践の束縛から解放することである。このモダニティの内省はあらゆる人間行為に含まれる内省とは区別される。モダニティの内省は「社会活動および自然との物質的関係の大半の側面が、新たな情報や知識に照らして継続的に修正を受けやすいこと」（Giddens, 1991, 訳22頁）を意味している。

そして、ハイ・モダニティの世界に生きるということはリスクの環境に生きるということである。それは「モダニティが個人を複雑多様な選択に直面させ、さらに、それを根拠づけないが故に、どの選択肢を選ぶべきかについてほとんど助けてくれない」（Giddens, 1991, 訳89頁）からである。モダニティ文化はリスク文化であることになる（Giddens, 1991, 訳４頁）。

２．ギデンズの内省概念

ギデンズによれば、自己は内省的プロジェクト（reflexive project）であり、個人はその責任を負っている。また、自己は過去から予期される未来へと続く発達の軌跡を形づくっている。内省は広く浸透するものであると同時に継続的である。自己アイデンティティは一貫した現象として物語を前提とすることがはっきりと示されている（Giddens, 1991, 訳84頁）。そして、自己実現は時間をコントロールすることを意味する。自己の内省は身体にまで拡張されるが、身体は単なる受動的物体ではなく、行為システムの一部となっている。そして、自己実現は機会とリスクのバランスの観点から理解されるようになる（Giddens, 1991, 訳86頁）。

ギデンズによると、内省は人間すべての行為を規定する特性であり、「人はすべて、行為の不可欠な要素として、日常的に自らが行う事柄の根拠と不断に接触を保ち続けている」（Giddens, 1990, 訳53頁）。そして、あらゆる人間が自らの活動の環境を自分の行為の特徴としてモニタリングしている。自己のアイデンティティは内省的意識を前提としている。それは自己アイデンティティが人間の内省的な活動の中で常に作られ、維持されなくてはならないものであり、内省的に達成されるものだからである（Giddens, 1991, 訳244頁）。

そして、自己アイデンティティの内省的な構築は過去を解釈することと同時に将来へ向けて準備することにかかわっている（Giddens, 1991, 訳94頁）。自己アイデンティティは行為主体によって内省的に解釈される継続性を有している（Giddens, 1991, 訳57頁）。したがって、自己の内省的プロジェクトは一貫した、しかし、絶えず修正される生活史の物語にその本質があり、抽象的システムを通した複数の選択の中で実行されるものとなっている。

そして、ギデンズによると、モダニティの内省はあらゆる人間行為に内属する行為の内省とは区別されなければならない（Giddens, 1991, 訳22頁）。モダニティの内省はシステムの再生産の基盤そのものの中に入り込み、その結果、思考と行為とはつねに互いに反照し合うようになる。そして、制度的内省は社会秩序の成熟に伴い、広範に見い出されるようになる現象であり、それはモダニティの中核をなしている（Giddens, 1993, 訳30-31頁）。

ハイ・モダニティにおいては、自己は制度的脈絡と同様に、内省的に形成されなくてはならない。しかも、この自己の形成という課題は多様な選択肢と可能性による混乱の中で達成されなくてはならない（Giddens, 1991, 訳３頁）。自己の内省において、自己アイデンティティは本質的に脆弱である（Giddens, 1991, 訳210頁）。近代社会における自己は壊れやすく、危うく、分裂し、断片化されている（Giddens, 1991, 訳191頁）。今日のリスクは進行するグローバル化過程の結果であり、またモダニティの暗い面の一部である（Giddens, 1991, 訳138頁）。このような状況において時空の拡大が生じ、「組み込み解消」がなされ、そこから、内省が活発化するようになる。

「組み込み解消」のメカニズムは社会関係を相互行為のローカルな脈絡から引き離し、時空間の無限の広がりの中に再構築することであり、社会関係を特殊な組み込みの呪縛から解放し、広範な時間・空間の中に再統合することである（Giddens, 1990, 訳35-36頁）。このような「組み込み解消」のメカニズムとして、貨幣のような象徴的通標の創造と（科学技術上の成果や職業上の専門的知識の体系である）専門家システムの確立の２つがあげられる（Giddens, 1990, 訳36-39頁）。

３．親密性の変容

ギデンズによると、セラピーはモダニティの内省に伴う現象である[注5]。セラピーは自己の内省的プロジェクトに深く組み込まれた専門家システムである。そして、セラピーの登場は純粋な関係性の出現と緊密に結びついている（Giddens, 1991, 訳203頁）。純粋な関係性とは外的な規準が解消してしまうような関係であり、社会的、経済的生活という外的条件には結びついておらず、自由に浮遊しているものである（Giddens, 1991, 訳105頁）。そして、純粋な関係性はハイ・モダニティにおける自己の内省にとって基本的に重要なものであり、それは自己の内省的プロジェクトを形づくるための鍵となる背景となっている（Giddens, 1991, 訳211頁）。

しかし、純粋な関係性は外的な道徳的基準を欠いているがゆえに、運命決定的なときや人生の他の大きな局面における安心の源泉としては脆弱なものである。そしてまた、それは内的な緊張や矛盾さえも抱え込んでいる（Giddens, 1991, 訳212頁）。純粋な関係性や親密な関係は自己の統一感にとって莫大な重荷となり、

関係性が外的基準を欠いている限り、「信頼性」（authenticity）によってのみ道徳的に利用可能となるものである（Giddens, 1991, 訳211頁）。

ギデンズによると、このような純粋な関係性は開かれた形で、途切れることなく、内省的に形成される。そして、内省は抽象的システムの影響と結びつき、心的過程と同時に、身体にも広く影響を及ぼしている（Giddens, 1991, 訳８頁）。純粋な関係性は親密な関係に依存している。親密な関係は独自の内省と内的に準拠する秩序を持っており、長期にわたる安定した関係の第一条件である（Giddens, 1991, 訳７頁）。親密性を期待することは「内省的プロジェクトと純粋な関係性との間に密接なつながりを与える」（Giddens, 1991, 訳106頁）ことになる。

そして、今日、このような親密な関係が変容してきている（Giddens, 1992）。ローカルなものとグローバルなものとの相互作用の一方の極には親密な関係の変容が生じている（Giddens, 1991, 訳７頁）。親密な関係の変容は基本的信頼に基づく自己実現を求めるものとなり、相互の自己開示に導かれた関係としての人格的、性愛的絆を形成し、自己達成に関する関心を生み出すようになる。そして、親密な関係性の変容は自我の形成の内省的企てとなる（Giddens, 1990, 訳142頁）。

Ⅲ．ギデンズの内省理論の問題

１．個人主義的な内省概念

ギデンズにおいて、ハイ・モダニティの時代には「組み込み解消」によって時空の拡大、グローバル化がなされ、人々が孤立化し、不安定化し、そこにリスクが生じるが、リスク解決のために内省が活性化するようになる。内省の近代プロジェクトはリスクを乗り越えることであり、そのために専門家システムが必要であり、専門家によるセラピーが大きな役割を果たすようになる。それによって純粋な関係性が生み出され、社会の変容がもたらされるようになる。

このようなギデンズの内省理論に関してさまざまな批判がなされてきている。まず第１に、ギデンズの内省概念は狭く、特殊西欧的なものとなっている。アダムズによれば、ギデンズの思考は近代個人主義的性格が強く、その内省概念は、事実上、西洋後期近代社会の文化と伝統の産物であり、その範囲内のものとなっている（Adams, 2007, 2008）。また、N・ムゼリスによると、ギデンズの理論は近代合理主義的であり、内省概念が特殊西洋的となっており、内省を目的-手段の図式に基づいて捉え、道具的側面が強調されている（Mouzelis, 1999：85）。そしてまた、D・スミスによれば、ギデンズの「内省的近代化」論は楽観的なカリフォルニアイズムとなってしまっている（Smith, 1999：124）。ラッシュによると、「ベックとギデンズ、そして私は、これまでの研究において、どちらかといえば個人主義的内省の概念を提示してきた」（Lash, 1994b, 訳364頁）のである。

このようなことから、内省概念の内容を単なる個人主義的なものから社会的なものに移行すべきことになる。ラッシュによれば、ギデンズは「内省的近代化」の担い手を専門家システムに求めているが、担い手を集合体、組織、あるいは集合行動や社会運動などに広げ、それらによる集合的内省もまた考えられなければならない。そうすれば、「内省的モダニティは地域主義と新たな社会運動の脱物質的関心に根ざした急進的、多元的な民主制の政治を提供していく」（Lash, 1994a, 訳211頁）ものとなる。そしてまた、「かつては個々人と深く関わる過程とされたものが、現在では何よりもまず制度と制度的内省性の問題になってきている」（Lash, 1994a, 訳261頁）のである。

２．認知中心的な内省概念

そしてまた、ギデンズ理論は認知中心的であり、感情を無視しているという批判がなされている。アダムズによると、ギデンズは感情的、無意識的、非合理的、関係的、曖昧なダイナミックスを無視している（Adams, 2008）。そして、ムゼリスによれば、ギデンズの内省概念は狭くなっており、非道具的、非活動的側面が過小評価され、認知中心の合理的思考となっている（Mouzelis, 1999：95）。ムゼリスはギデンズの内省概念を「カタファティック」（cataphatic）と呼び、自らの内省概念を「アポファティック」（apophatic）と呼んでいる。「アポファティック」とは合理的思考を最小化し、宗教的な内省を含み、非活動的、非道具的、非合理的で信頼性に基づく内省を表わしている。

また、ラッシュによると、ギデンズは内省が本質的に認知作用に関するものと考え、文化構造の持つ新たな重要性を十分考慮していない（Lash, 1994a, 訳207頁）。そこでラッシュは、自ら美的領域に着目する。ラッシュによると、内省のタイプには認知的内省、解釈学的内省、美的内省があり、認知的内省は功利的個人主義であり、概念的に示されるものである。解釈学的内省は共同体的で、習わしによって表わされるものである（Lash, 1994a, 訳290頁）。そして、美的内省は表現的個人主義であり、日常の経験に対してミメーシス的に作用していく限りにおいて内省的である。それは「啓蒙思想というハイ・モダニティの伝統ではなく、芸術におけるモダニティの伝統の中にまさしく見い出すことができる」（Lash, 1994a, 訳248頁）ものである。

３．構造なき内省概念

ラッシュによると、ギデンズにおいて構造的条件についてはあまり多く語られていない（Lash, 1994a, 1994b）。また、アダムズによれば、ギデンズは社会構造を認識することに失敗しており、弱い社会構造、同質的な社会構造がイメージされ、内省の構造的条件について十分な理解がなされていない（Adams, 2008：137）。けれども、内省を支えているのは情報コミュニケーション構造の全地球規模に広がるネットワ

ークと局域的ネットワークが接合した網状の組織であり、情報コミュニケーション構造における情報（と資本）の蓄積は内省的モダニティの推進力となっている（Lash, 1994a, 訳224頁, 訳238頁）。

内省的モダニティにおいては、生活機会は情報様式におけるその人の位置に依拠しており、「新たな情報コミュニケーション構造に対する行為主体の接近利用権と位置づけ」（Lash, 1994a, 訳224頁）が重要である。そして、情報社会から排除された人々、つまり、アンダークラス、「マクドナルド・プロレタリアート」、衣料部門労働者、家事使用人、ショッピングセンターの従業員、またスラム地区の住民などは情報化されていない弱者となっており、情報コミュニケーション構造には格差・不平等が存在している（Lash, 1994a, 訳242頁）。ギデンズにおいて「内省的近代化」の主体が専門家システムに求められているが、専門家システムそのものが情報コミュニケーション構造内部の場所で蓄積された情報と情報処理保有能力の結節点となっている（Lash, 1994a, 訳237頁）。

そしてまた、ギデンズの場合、リスクは誰でも平等に経験するものとされ、そのリスクを克服する内省はすべての文化や歴史に存在するものと主張されている。しかし、現代社会においては多くの不平等や格差があり、リスクの克服には様々な問題が存在している。内省は人間にもともと備わっているものでもなければ、普遍的なものではない。内省には経済的、文化的、社会的な多様性が存在している。とりわけ、現代においては経済的、文化的、社会的なズレ・不一致・対立が一層広まり、深まってきており、リスクの克服には困難な問題が多く含まれている。その意味において、内省を生み出す「問題的状況」を具体的に解明し、問題を解決し、新たなものを生み出す創発的内省の内的な過程を詳細に明らかにする必要がある。

Ⅳ．コミュニケーションと内省

1．内的世界の社会性

人間の内的世界の研究は、現在もなお、それほど多くなく、その重要性が次第に認識されてきているものの、軽視され続けている。その点において、ミードは人間の内的世界を正面から取り上げ、その社会性を明確に問題としようとしていた。ミードの社会行動主義は、ワトソンの行動主義とは異なり、人間の内的側面を正面から取り扱おうとするものである。そしてまた、ミードの社会心理学は思考の問題解決機能を解明する機能主義心理学の個人的性格を払拭し、内的世界の社会性を他者とのコミュニケーションによる役割取得（role-taking）過程において生じることを明らかにしている（船津, 1983, 2007）。ミードの社会行動主義は人間の内的過程の社会性を解明しようとするものとなっている。

ミードによると、意味は他者との相互作用の過程において社会的に形成される社会性を有している。意味の社会性は言語を通じての役割取得によって生み出されるものである。ミードによれば、社会性には無脊椎動物の社会性と脊椎動物の社会性の２つがある。蟻や蜂などの無脊椎動物の世界においては、個体の行為は他の個体の行為を通じてのみ遂行される。つまり、そこにおいて共同的行為を可能とするのは成員の生理学的分化による（Mead, 1924-25, 訳49頁）。

これに対して、脊椎動物においては生殖や子供の養育と保護などの分化のほかは、社会的行為の共同性を媒介する遺伝的な生理学的分化は見られない。そこで他者とうまくやっていくためには他者の行為を自分自身の中に取り入れて、共同的行為を遂行しなければならない。したがって、そこでは生理学的分化とは区別される、もうひとつの社会組織の原理が必要となる（Mead, 1924-25. 訳53頁）。すなわち、それが役割取得である。人間において他者と共同していくためには他者の態度を取得しなければならない。

人間は他者の期待とのかかわりにおいて自我を形づくる。自我は他者の役割取得を通じて形成される。役割取得とは「意味のある他者」（significant others）の期待を取り入れることである。そして、役割取得は「意味のあるシンボル」（significant symbol）を通じて行われる。「意味のあるシンボル」とは、「他者に向けられたときに自分にも向けられ、また、自分に向けられるときにも他者にも、それも形式上はすべての他者に向けられるようなジェスチュア、サイン、言葉」（Mead, 1922, 訳25頁）を指している[注6]。

「意味のあるシンボル」の典型である人間の音声は、音声を発することによって、他者に一定の反応を引き起こすとともに、音声を発した本人にも同一の反応を引き起こさせる。音声は他者と自己との両方の耳に入っていく。そのことによって、自分の音声が相手に対してどのような反応を引き起こすのかを考えうるようになる。つまり、他者のうちに引き起こすのと同一の反応を自己のうちに引き起こすことになる。ミードの言葉によれば、「ジェスチュアは他者に外的に（explicitly）引き起こす（またはそう考えられる）反応と同一の反応を、ジェスチュアを行なう人間のうちに内的に（implicitly）引き起こす場合に、『意味のあるシンボル』となる」（Mead, 1934：47, 訳52頁）。

このような内的な反応は行動への準備状態、つまり、態度（attitude）を表わしている。態度とは外的な行動への構えを意味し、外的な行動に先立って生まれるものである。そして、ジェスチュアの意味が他者の反応であるならば、内的な反応である態度が「意味のあるシンボル」の意味ということになる。そして、「自分に対する他者の態度を取得し、自分の行為によって他者が引き起こす行為への構えを自分自身のうちに引き起こす限りにおいて、人間はジェスチュアの意味を自分自身に対して表示している」（Mead, 1922, 訳22頁）ことになる。

そして、「われわれは指示を与える場合に、他者に指示を与えると同時に自分自身に対しても指示を与え

ている。われわれは自分の要請に対する他者の反応の態度も取得している」(Mead, 1922, 訳23頁) ことになる。したがって、同一の反応を引き起こすとは同一の意味を自己と他者が分けもつこと、つまり、意味を共有することを表わしている(注7)。このような共通の意味世界が形づくられると、そこに社会性がもたらされる。内的世界の社会性は意味の共有を前提として生み出されてくるものである。

2．内的世界の創発性

ギデンズによると、ミードにおいては「主我」(I) の活動に重点が置かれておらず、ミードが専心没頭していたのは「客我」(me) である。そして、「客我」の強調はミードの信奉者の著書においてさらにいっそう顕著なものとなっている (Giddens, 1993, 訳51-52頁)。けれども、これは必ずしも適切な理解とはいえない。ミードにおいて「主我」の内容が曖昧であり、明確な規定が示されていないとしても、ミード自身は「主我」を決して軽視しておらず、「問題的状況」における人間の内省による新たなものの創発を明らかにしている。かれが内省的思考を考察することにおいて、このことがよく示されている。

内省的思考とは問題を解決する人間の能力を表わし、そこにおいて他者の態度が表示され、それに関連して自己の態度が表示される。そのことによって、自己と他者との関係が再構成され、新たな行為の可能性が追求されるようになる。内省的思考は「現在の行動の問題を、過去と未来の両方に照らして、あるいは、それらとの関連において解決しうる能力」(Mead, 1934：100, 訳108頁) である。

そして、このような人間の内的世界のあり方については、ミードの後継者であるH・ブルーマーが「自分自身との相互作用」(self interaction) として捉えている(注8)。ブルーマーによると、人間は非常に深い意味で社会的である。すなわち、人間は他者と相互作用するだけではなく、自分自身とも相互作用している。他者との相互作用を内在化することによって、「自分自身との相互作用」がなされる。「自分自身との相互作用」は「表示」(indication) と「解釈」(interpretation) からなっている。「表示」とは行為者が対象を自分に表示することである。「表示」によって、対象をその背景から解き放し、それに意味を付与し、対象とすることができる。その対象は単なる刺激とは異なるものとなる。そして、「解釈」は意味の取り扱いの問題となる。行為者は自分が置かれた状況や行為の方向に照らして意味を選択し、チェックし、留保し、再分類し、変容する。「解釈」は既存の意味の単なる自動的適用ではなく、意味が行為のガイダンスや形成の道具として用いられ、改変されるような形成的過程 (formative process) である (Blumer, 1969：5)。

「自分自身との相互作用」は、「われわれを世界の内部にいるのではなく、世界に対峙させ、単に世界に反応するのではなく、規定過程を通じて、世界に立ち向かい、それを処理することを要請する。また、行為を単に放散 (release) させるのではなく、行為を構成 (construct) させるようになる」(Blumer, 1969：63-64)。そこから、人間は単なる反応有機体から、より積極的な活動的有機体となり、ものごとに対峙し、それに働き返し、それを受容し、拒否し、また、変容するようになる。人間は自己を内省し、内的世界の活性化によって新たなものを創発することができるようになり、社会構造の拘束から解放され、主体的な自我を形成できるようになる。

人間のコミュニケーションは他者との外的なコミュニケーションのみならず、自己自身との内的なコミュニケーションによっても成り立っている。そこに人間のコミュニケーションの特質が存している。人間は「意味のあるシンボル」を通じて他者と会話するとともに、自己とも会話を行うことができる。他者との会話という外的コミュニケーションが個人のなかに内在化することによって、内的会話としての内的コミュニケーションが発生するようになる。そこにおいて外的と内的の２つのコミュニケーションが重層して行われるようになる。人間において、コミュニケーションが重要であるのは、それが人間をして自分を自分自身の対象とさせるからである。「意味のあるシンボル」を媒介とするコミュニケーションによって自己対象化がなされる。そして、自己を対象化することは、すなわち、自己を内省化することをもたらす。そこに内的世界が開かれ、内的コミュニケーションが展開されることになる。

内的コミュニケーションは外的コミュニケーションの単なるミニチュア版ではなく、それとは相対的に独立な内容をもっている。つまり、内的コミュニケーションにおいては他者の態度がイメージされ、それを自己の置かれた位置や行為の方向に照らして「解釈」がなされ、その修正や再構成が行われる。内的コミュニケーションによって、これまで存在しない新たなものが創出されて、自己と他者との関係が再構成され、新しい状況の形成が可能とされるようになる(注9)。

社会的相互作用において、行為者間の関係が調和的なものから対立的なものに変化したときに、個人の行為者の内部において内的コミュニケーションが行われる。外的行為の中止に伴って、内的コミュニケーションが活発化する。人間は他の動物とは異なり、意識の中において対立する刺激や対立する反応をもち、それらを内的コミュニケーションを通じて再構成し、新たなものを生み出すことができる (cf. Feffer, 1993：249-250)。それは単に認知的過程としてのみならず、感情的過程としても行われるものである (船津、2008a)。

内的世界は固定してしまうのではなく、変化・変容し、また新たな生成がなされるようになる。そこに、内的世界の創発性が存在する。内的世界は固定性や規範性によって規定されるのではなく、新たな内的世界の形成や変容、つまり、創発が生み出されている。内

的世界の創発は既成の内的世界が変容され、新たなものが生成されてくることを表わしている。このようなことによって、状況が再構成され、「問題的状況」が克服されるようになる。内的世界の活性化は社会関係の断絶を越え、それを乗り越えさせるものとなる。

3.「親密性」の再構成―「リスク社会」の乗り越え

こんにちのリスク社会は「自分自身との相互作用」、内的コミュニケーションによって乗り越えられることになる。「自分自身との相互作用」、内的コミュニケーションは自己の内省に当たる。そして、内省によるリスクの乗り越えは「新しい合理性」の道を踏み出すことによって成し遂げられるようになる。

人間の自我の形成は、一般に、「親密性」と強く結びついてなされる。C・H・クーリーにしたがえば、家族、子供の遊び仲間、大人の近隣集団や地域集団などの、フェイス・トゥ・フェイスな親密な結び付きと協同が存在している「第一次集団」において、人間の自我の社会性と愛や正義などの第一次的理想が形成される（Cooley, 1902）。そしてまた、人々において「仲のよい友達と話しをしているとき」とか、「一家団らんをしているとき」に安らぎを感じ、そこに「本当の自分」を見い出すようになる。

しかし、他方、現代人において、本当でない「うその自分」が表現される場としても、「親密性」が選ばれ、そして、そこに「不誠実な自我」が生み出されている。「これは本当の自分ではないと思ったり、感じたりする」という「うその自分」には、自分が努力しても目標が達成されない「失敗的自我」、その場その場で適当にやってしまう「場当たり的自我」、人のためではなく、自分のために行動する「利己的自我」、親しい人間との間で「うその自分」を見せる「不誠実な自我」の4つのタイプが存在している（Turner and Schutte, 1981）。そして、こんにち、人々において「不誠実な自我」が多くなってきている。

「うその自分」は一般に「疎遠性」と結びついて現れる。現代の巨大組織は「疎遠性」によって彩られており、そこでは「親密性」の合理化がなされている。サービス産業の多くでは「本当の自分」よりも「うその自分」を表現することが要求される。そこでは、人びとは組織の期待に応えて「うその自分」を表現せざるを得なくなっている。このように、「うその自分」を出すのはそこに自他の不一致があり、他者の期待する自分と「本当の自分」との間にズレや対立が存在しているからである。

他方、こんにち、「うその自分」が「親密性」からも生み出されるようになってきている。親や友達など親密な他者との関係において「本当の自分」ではなく、「相手に合わせて、自分を装う」という「うその自分」を演じることが行われている。このような「親密性」における「うその自分」の出現は、親や友達との関係の「親密性」自体がいまや「問題的状況」であることを表している。親、兄弟、友達との緊張関係が存在し、他者の期待にあわせて「うその自分」を表現する「不誠実な自我」が生み出されている。そこでは、「親密性」からは「本当の自分」ではなく、「うその自分」が生み出されている。そこにおいて「うその自分」が一人歩きし、「本当の自分」が見失われ、自己喪失の恐れが生じることになる。このような「うその自分」の出現は「問題的状況」にある「親密性」の自己意識的把握がなされていることを意味しており、そこにおいて「親密性」の再構成が必要とされる。

「親密性」には少なくとも3つのタイプが考えられる（船津, 2008b）。第1のタイプは「伝統的親密性」である。そこでは人々が完全に一致し、すべてが一元化されており、個人のプライバシーは認められないものとなっている。そして、人間関係も経済外的力に基づいたタテの関係となっている。したがって、このような「伝統的親密性」は、ギデンズが主張するように、純粋な関係性の形成によって「親密性」の民主化が必要とされる（Giddens, 1992）。そのことによって、人々が抑圧から解放され、自立と尊敬が存在し、自由と平等からなる純粋な関係性が生み出されるようになる。そこにおいては、個性や独自性が評価され、人々の関係は対等な関係となっている。そこに「親密性の変容」がなされていることになる。ラッシュによると、ギデンズは感情的関係を民主化傾向が内省性と自立性、対話にもとづく能動的信頼と緊密に結びついたサブ政治の領域と見なしている（Lash, 1994b, 訳372頁）。

しかし、そこに生まれる「近代的親密性」は私的領域に限定されたものとなっている。近代社会においては公私の分離がなされ、公的領域では合理性からなる経済の論理が貫かれ、「親密性」よりも「疎遠性」が存在している。この私的領域に限定された「親密性」が第2のタイプの「親密性」である。私的な「親密性」は、公的領域の合理性からみると、非合理的なものとされる。「親密性」は私的領域に押しやられ、非合理的な「親密性」となる。近代社会は「親密性」を非合理的なものとして、私的領域の中に押し込めたのである。

他方また、公的領域では、たとえば、インフォーマル集団の発見とフォーマル組織への取り込みに見られるように、非合理な「親密性」の「合理化」がなされている。そのため、公的領域において人々は「印象操作」や「感情操作」を余儀なくされている。逆に、私的領域を公的領域に持ち込むことは、電車内のケータイ使用に見られるように、公私混同とされ、人々に違和感を与えるものとなっている。近代社会においては、他者の期待と自己の要求のズレ、そして、自他の関係に対立が存在する「問題的状況」が生じている。「問題的状況」では「親密性」そのものが人々の演技を必要とするものとならざるを得なくなっている。

こんにち、親密な関係においても、自他の不一致から「印象操作」や「感情操作」が必要不可欠になっている。このような状況において、人びとの自己意識的

な内省による「問題的状況」の乗り越えが行われるようになる。内省は「問題的状況」において出現し、その活性化によって問題を解決し、新しい状況を生み出す創発的内省として、既存の自我のあり方を見直し、修正し、変更し、再構成するようになる。そして、新しく生まれ変わった自我を通じて他者も変わるようになる。ここから、社会は変化するもの、ダイナミックなものとしてイメージされることになる。創発的内省による「問題的状況」の乗り越えは、これまでの「親密性」のあり方を再検討し、新たな「親密性」を創出することになる。そして、単なる生理学的「親密性」から自己意識的「親密性」となり、自他関係の変容が行なわれるようになる。そこにおいて「親密性」の再構成がなされる。

再構成された「親密性」は、「伝統的親密性」のように、人々の間の完全一致や一元化が生じているものではない。人々は他者からの一方的な期待から解放されており、他者との関係は対等なヨコの関係となっている。そこでは、人々の自由なネットワークからなる新たな「親密性」が生み出されている。そして、新しい「親密性」は、近代における「親密性」のように非合理なものともはや規定されない。それは産業や経済の目的合理性ではなく、「コミュニケーション合理性」にもとづく「親密性」となっている。

これまでの合理性はモノの合理性であり、自然支配的な道具的合理性であった。それは目的に対する手段の合理性、産業や生産中心の経済的効率の合理性を意味するものであった。そのような合理性が人間と人間の関係を色づけ、リスク社会を生み出す原因ともなっていた。しかし、これからは、人と人との合理性である「コミュニケーション合理性」を展開する必要がある。「コミュニケーション合理性」とは「人々の相互の理解と合意が形成され、行為の調整が行われる合理性」(Harbermas, 1985-7) を表わしている。このような人間同士のヨコのつながりの合理性を広範に実現していく必要がある。

「コミュニケーション合理性」は他者に向けた活動であるとともに、自己に向けられた活動でもある。つまり、それは障害者、被災者、高齢者などの弱者やマイノリティへの支援などの活動において具体的に展開されると同時に、人々が他者との間に自己の存在価値を見い出し、そこに「本当の自分」を発見できるようになるものである。そして、このような合理性は普遍的なコンセンサスのみを求めるのではなく、ローカルな合理性を認めるものでもある。しかも、それは固定した「堅い合理性」ではなく、変容可能であり、状況に対して柔軟に対処しうる「やわらかい合理性」でもある。このような人と人とのやわらかい「コミュニケーション合理性」に基づいて、新たな社会が形成されるようになる。そこにおいて、自然と人間との共生、人間同士の共存、人間の社会的自我の確立がなされることになる。

「コミュニケーション合理性」に基づく「親密性」において、人々は「本当の自分」を表現することが可能となる。そこにおいて、オルターナティブな「親密性」として「現代的親密性」がその姿を現していることになる。ミードは、『精神・自我・社会』(1934) の終わり近くにおいて、次のように述べている。

人間社会の理想は人々が相互関係において緊密に結びつき、その結果として、自分自身の一定の役割を遂行する人々が、自分が影響を与える人々の態度を取得できるようなコミュニケーション・システムを完全に発達させることがある。コミュニケーションの発達は単に抽象的観念の問題ではなく、「意味のあるシンボル」を通じてコミュニケーションをすることによって、他の人々の態度や立場に自分自身を置く過程である。…(中略)…もし、そのコミュニケーション・システムが理論的に完全にできあがるならば、人間は他者にさまざまな影響を与えるように、自分自身に影響を与えるようになるだろう。それがコミュニケーションの理想であり、いかなるところにおいて理解されようとも論理的ディスコースにおいて到達される理想である。…(中略)…普遍的なディスコースは、したがって、コミュニケーションのフォーマルな理想なのである(Mead, 1934, 訳339-340頁).

注

1) reflexivityは「再帰性」と訳される場合が多いが、他者の態度や期待を通じて自己の内的世界を振り返ることを意味するので、ここでは「内省」を用いることにする。
2) ギデンズは『近代性の帰結』(1990)(邦訳『近代とはいかなる時代か?』)では「構造的内省性」を主として取扱い、『モダニティと自己アイデンティティ』(1991)や『親密性の変容』(1992)においては「自己内省性」が主に問題とされている。
3) 内省には、ラッシュによれば、認知的内省、美的内省、解釈学的内省などが行われており(Lash, 1994a)、また、アーチャーによると、コミュニケーション的内省、自律的内省、メタ内省などのタイプが存在している(Archer, 2003)。
4) disembeddingの訳語として「脱埋め込み」が多く用いられているが、一定の要因を枠組みの中に組み込むことを解消することを表すので、ここでは「組み込み解消」とする。
5) ギデンズはセラピーをライフ・ポリティクスの問題の一環として取り扱っている。ライフ・ポリティクスとは内省的に行われ秩序の政治であり、それは「内省的に秩序付けられた環境での自己実現の政治」(Giddens, 1991, 訳242頁)である。ライフ・ポリティクスの議題はモダニティの内的準拠システムの拡張から生じる。
6) ミードによると、意味には2つのものがある。ひとつは観察者が見た場合の意味であり、もうひとつは行為者自身が意識している意味である。一般の動物においては、他の動物に反応を引き起こさせる自分のジェスチュアの意味を知ることはないが、人間はジェスチュアの意味を意識している。人間はジェスチュアが引き起こす他者の反応をあらかじめ予測して、自分のジェスチュアを行っている。しかも、人間は他者の反応の

みならず、自己の反応についても意識している。他者の反応と自己の反応、およびその間の関係を意識していることが、人間の意味の意識である。

7）ミードはモリスの考えるような行動主義者ではなく、また自らを社会行動主義者とは規定していない。モリスは、ミードとは異なり、ラディカル経験主義者の観点から、「意味のあるシンボル」を「それを生み出す有機体と他の有機体が持つのと同じ意味合いを持つサイン」と規定している（cf. Gillespie, 2005）。

8）ブルーマーによると、「自分自身との相互作用」はシンボリックな相互作用過程において生じる。シンボリックな相互作用は意味を表現する言葉を中心とするシンボルを媒介とする人間の社会的相互作用である（Blumer, 1969, 船津, 1976）。シンボリックな相互作用は相互作用の特殊な形態であり、人間に特有なものである。そこにおいて人間の行為は他者の行為に対して直接になされるのではなく、行為に付与する意味にもとづいてなされている。

9）このような内省的思考、「自分自身との相互作用」、内的コミュニケーションはルーティーン状況というよりは、「問題的状況」において顕在化してくる。つまり、「個人の行為がブロックされたときに、自分自身への表示が行なわれる」（Morrione and Farberman, 1981：116）ようになる。そこにおいて、他者の反応が表示され、それに関連して自己の態度が表示される。そのことによって、自己と他者との関係が明らかにされ、そこから新たな状況の形成が追求されるようになる。このような内省的思考、「自分自身との相互作用」、内的コミュニケーション過程の展開によって、「問題的状況」が乗り越えられ、新しい状況が生み出されてくるようになる。

参考文献

Adams, M., 2007, *Self and Social Change*, Sage Pulications.

Adams, M., 2008, *The Reflexive Self*, DM Verlag Dr. Müller.

Archer, M.S., 2003, *Structure, Agency and the Internal Conversation*, Cambridge University Press.

Athens, L.H., 1993, Blumer's Advanced Social Psychology Course, *Studies in Symbolic Interaction*, 14：155-162.

Beck, U., 1986, *Risikogesellschaft*, Suhrkamp. 東 廉, 伊藤美登里訳『危険社会』法政大学出版局, 1998。

Beck, U., 1994a, The Reinvention of Politics, Beck, U., A. Giddens and S. Lash (eds.), *Reflexive Modernization*, pp. 1-55. 松尾精文ほか訳「政治の再創造」『再帰的近代化』而立書房, 1997, 10-103頁。

Becck, U., 1994b, Self-Dissolution and Self-Endangerment of Industrial Society, Beck, U., A. Giddens and S. Lash (eds.), *Reflexive Modernization*, pp. 174-183. 松尾精文ほか訳「工業社会の自己解体と自己加害」『再帰的近代化』而立書房, 1997, 318-334頁。

Beck, U., A. Giddens and S. Lash, 1994, *Reflexive Modernization*, Polity Press. 松尾精文ほか訳『再帰的近代化』而立書房, 1997。

Blumer, H., 1937, Social Psychology, in Schmidt, E.P. (ed.), *Man and Society*, Prentice-Hall, pp. 144-198.

Blumer, H., 1962, Society as Symbolic Interaction, in Rose, A. (ed.), *Human Behavior and Social Processes*, pp. 179-192.

Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism*, Prentice-Hall. 後藤将之訳『シンボリック相互作用論』 勁草書房, 1991。

Blumer, H., 2004, *George Herbert Mead and Human Conduct*, Altamira Press.

Cooley, C.H., 1902, *Human Nature and the Social Order*, Schocken Books.

Dewey, J., 1938, *Logic*, Henry Holt and Co. 魚津郁夫訳『論理学―探求の理論』中央公論社, 1968。

Faris, E., 1937, The Social Psychology of George Mead, *A.J.S.*, 43：391-403.

Feffer, A., 1993, *The Chicago Pragmatists and American Progressism*, Cornell University Press.

船津 衛, 1976,『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣。

船津 衛, 1983,『自我の社会理論』恒星社厚生閣。

船津 衛, 1989,『ミード自我論の研究』恒星社厚生閣。

船津 衛, 2007,「アメリカン・プラグマティズム２」伊藤邦武編『社会の哲学』（『哲学の歴史』８）中央公論新社, 576-637頁。

船津 衛, 2008a,「自己感情論の展開」『放送大学研究年報』26, 67-75頁。

船津 衛, 2008b,「自我と『親密性』」大橋良和ほか編『学問の小径』世界思想社, 21-31頁。

Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*, Statesman & Nation Publishing Co. 松尾精文ほか訳『近代とはいかなる時代か？』而立書房, 1993。

Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity*, Polity Press. 秋吉美都ほか訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社, 2005。

Giddens, A., 1992, *The Transformation of Intimacy*, Polity Press. 松尾精文ほか訳『親密性の変容』 而立書房 1995.

Giddens, A., 1993, *New Rules of Sociological Method*, Second Edition, Polity Press. 松尾精文ほか訳『社会学の新しい方法規準』第２版, 而立書房, 2000。

Giddens, A., 1994a, Living in a Post-Traditional Society, Beck, U., A. Giddens and S. Lash (eds.), *Reflexive Modernization*, pp. 56-109. 松尾精文ほか訳「ポスト伝統社会に生きること」『再帰的近代化』 而立書房, 1997, 107-204頁。

Giddens, A., 1994b, Risk, Trust, Reflexivity, Beck, U., A. Giddens and S. Lash (eds.), *Reflexive Modernization*, pp. 184-197. 松尾精文ほか訳「リスク、信頼、再帰性」『再帰的近代化』而立書房, 1997, 335-359頁。

Gillespie, A., 2005, G.H. Mead：Theorist of the Social Act, *Journal for the Theory of Social Behavior*, 35(1)：19-39.

Habermas, U., 1981, *Theorie des kommunikativen Handeln*, Suhrkamp. 河上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論』上・中・下, 未来社, 1985-87。

Lash, S., 1994a, Reflexivity and its Doubles, Beck, U., A. Giddens and S. Lash (eds.), *Reflexive Modernization*, pp. 110-173. 松尾精文ほか訳「再帰性とその分身」『再帰的近代化』而立書房, 1997, 205-315頁。

Lash, S., 1994b, Expert-systems or Situated Interpritaion ?, Beck, U., A. Giddens and S. Lash (eds.), *Reflexive Modernization*, pp. 198-215. 松尾精文ほか訳「専門家システム化か？ 状況づけられた解釈か？」『再帰的近代化』而立書房, 1997, 360-391頁。

Lemert, C., 1999, A World of Differences, O'Brien, M., S. Penna and C. Hay(eds.), *Theorising Modernity*, Longmann, pp. 179-195.

Mead, G.H., 1910, Social Consciousness and the Consciousness of Meaning, *Psychological Bulletin*, 7：397-405.

Mead, G.H., 1913, The Social Self, *Journal of Philosophy*, 10：378-380. 船津　衛・徳川直人訳「社会的自我」『社会的自我』恒星社厚生閣, 1991, 1-14頁。

Mead, G.H., 1922, A Behavioristic Account of the Significant Symbol, *Journal of Philosophy*, 19：157-163. 船津　衛・徳川直人訳「意味のあるシンボルについての行動主義的説明」『社会的自我』恒星社厚生閣, 1991, 15-28頁。

Mead, G.H., 1924-25, The Genesis of the Self and Social Control, *International Journal of Ethics*, 35：251-277. 船津　衛・徳川直人訳「自我の発生と社会的コントロール」『社会的自我』恒星社厚生閣, 1991, 29-74頁。

Mead, G.H., 1934, *Mind, Self and Society*, (Morris, C.W., ed.) The University of Chicago Press. 稲葉三千男ほか訳『精神・自我・社会』青木書店, 1973。

Miller, D.L., 1981, The Meaning of Role-Taking, *Symbolic Interaction*, 4(2)：167-175.

Morrione, T.J. and Farberman, H.A., 1981, Conversation with Herbert Blumer：1, *Symbolic Interaction*, 4(2)：113-128.

Mouzelis, N., 1999, Exploring Post-Traditional Orders, O'Brien, M., S. Penna and C. Hay(eds.), *Theorising Modernity*, Longmann, pp. 83-97.

O'Brien, M., S. Penna and C. Hay(eds.), 1999, *Theorising Modernity*, Longmann,

Smith, D., 1999, Criminality, Social Environments and Late Modernity, O'Brien, M., S. Penna and C. Hay(eds.), *Theorising Modernity*, Longmann, pp. 121-138.

Turner, R.H. and J. Schutte, 1981, The True Self Method for Studying the Self-Conception, *Symbolic Interaction*, 4(1)：1-20.

(2009年11月 4 日受理)